

旅する丹後 ガゼルの瞳永
遠に

丹後 剛

プロローグ

ケニア共和国。1963年、英国より独立。58万km²の国土に2600万人が生きる。赤道直下に位置し、アフリカでも有数の野生生物相を誇るこの国は、私がどうしても行ってみたい国の一つだった。キリマンジャロ、ヘミングウェー、マサイ族、マラソンランナー、アフリカの優等生、風土病。野生の王国以外には漠としたイメージしかなかったが、今回いよいよケニア探訪の意思を固め、彼の国の状況を調べてみると、なかなか大変なところであることが明らかになってきた。

昨年（1997年）12月29日、大統領選挙が行われた。15人ほどの立候補者がおり、現職のモイ大統領は5選目を目指していた。一般に5選目ともなると、政治の内部は腐敗しきっていると考えられる。選挙管理委員会委員は、全て現大統領の息がかかっている。警察も賄賂で動く。実際の所ケニアの経済状況は下降している。看護婦のスト、沿岸域（モンバサが含まれる）での襲撃事件とそれによる住民の大量脱出。これらは、長期独裁政権の歪みがあらわになったものと言われる。少数民族出身の現大統領が政府の要職を身内のカレンジン族で固めるなど部族間対立の様相も呈し、選挙運動の期間中には、運動員やキャンペーン参加者が、対立する相手陣営の者達に殺されるという痛ましい事件が複数発生している。CNNが伝えるところでは、投票・開票に際して、現職はいくつもフェアでない手だてを講じたようだ。まず、反対派の一部の住民には、彼らの示すIDが無効として投票用紙を渡さなかった。雨を口実に、3日ほど投票日をずらしてしまった地域もある。開票には1週間ほどかかり、その間、投票箱ごと紛失したり、軍が投票箱を誘拐・監禁してしまった例もある。ある集計会場で副大統領が、君たちこれを忘れていと言いながら投票箱を持って現れるということがあったが、これはさすがにその場で拒否されたようだ。選挙管理委員会は、自らにその取締まり権限がないことなどを口実に、選挙期間中の傷害（殺人！）事件などの原因究明や責任追求をしない、と明言した。結局現職は、自ら改正しおいた憲法の規定、すなわち、第1回目の投票での最高得票者は、それが必要数に届かない場合でも、8州の内5州以上で25%以上の得票があれば、上位二者による決選投票を経ずに次の大統領になるというもの、により5選を果たす。現職は二百数十万票の得票があったと発表された。これがどの程度の信頼性と意味を持つ数値かはにわかに判断しがたいが、野党の結束が間に合わない場合でも、決選投票に持ち込むことができれば、結果は（「真実は」としたほうが正確かもしれない）、あるいは違っていたかも知れない。現在、現大統領の出身政党である与党KANUのみがケニアに全国的なネットワークを持つと言われており、その強みを活かすための憲法改正だったと聞く。

いわゆる貧困から犯罪も多発し、それは凶悪化の一途をたどっている。以前は、「泥棒！」と叫ぶと周りの人が捕まえてくれたりしたそうだが、今では泥棒も集団化し、場合によってはそれをかくまう者もあるらしい。

衛生状態も極めて悪い。黄熱病のワクチンとマラリアの予防薬は、マストだ。他にもA型、B型、E型肝炎、エボラ熱、ラッサ熱、デング熱、腸チフス、破傷風、狂犬病、眠り病、ポリオ、コレラ等々、日本では実感がないが、教科書に出てくるような有名な病気に本当に気を付けねばならない。出発の少し前に見た新聞は、エボラ熱に似た症状（全身から出血する）を呈する原因不明の急性の伝染病で二百数十人が亡くなったことを伝えていた。

それでも、ケニアの地を訪ねることにした。

そぞろ心に誘われるまま、と答えれば、あまりに軽率な判断だと言われるかもしれない。

旅立ち

1998年1月8日 夕方。オルリー空港よりアフリカ、ケニヤ・モンバサに向けて出発。

B747のチャーター機、座席は30c。予想されたことだが、モンゴロイドは私一人だけだ。今回は、エジプトの時のようなことはなく、極めてスムーズにことが運んでいる。雨期は、1年に2度ある。3～5月は大雨期といわれ、10～11月には小雨期がある。この時期もはずせなし、いい天候の下で野生の動物をいろいろ見てみたい。気をつけるべき風土病については、インターネットで相当程度情報が取れた。いずれもかえって不安材料となったが、2cm程のプリントアウトになるこれらの情報は決して無駄にはならないだろう。黄熱病や肝炎のワクチンなど当初は鬱陶しかったが、パスツール・インスティテュートに行くと、あれよあれよとことが進んだ。後で知ったが、黄熱病のワクチンは強すぎるので、他のワクチンと同時に接種することは一般に避けられているらしい。しかし、私の場合、A型肝炎のワクチンも同時に打たれ、数日すると、これまでにない倦怠感と背中（肝臓の部位らしい）の不快感に襲われ、半日程仕事を休んでしまった。全体的には、無理に年末の出発とせず、年明けにしたことで、各種の準備に余裕が持てた。例えば、デイバッグ。カメラとビデオを入れて持ち運ぶので、丈夫なものがよい。また、取り出しやすいように、ザックの半分くらいがチャックで開閉できるタイプがよい。この点、袋型ものは、使いにくい。双眼鏡、フィルムやテープ、バッテリーなどの小物とミネラルウォーターの小さなボトルなどを分けて入れられるよう、ポケットが2、3あった方がよい。サマリテーヌやらを回って一つ、緑色の手頃なのを見つけた。現地では、カーキ色のベストを着て動くことにしている。ポケットがたくさんあるので、露出計やらフィルターやらメモ帳やらすぐに取り出せる。普通の運動靴でも良かったのだろうが、ゴースポで一つ履き心地のよい軽登山靴を買った。新しくアーミーナイフやライターもこの際、購入した。ライターはジッポーのオイルライターで、金色の地に熱帯林の中のオウムとサイチョウが描かれた派手モノだ。蚊取り線香、虫避けスプレー、各種医薬品、軍手、粉末ポカリスエット、紙コップ、ロープ、古新聞、ウェットティッシュ、非常食。さすがに、持ち物が、出張で先進国に行く時とはガラリと変わる。ガイドブックはあまりいいのが見つからなかったが、現地の空港辺りで入手できることを期待する。

ところで、エジプト行きは悪夢の幕開けだった。一昨年のクリスマスの頃になる。私が朝6時半にオルリーに着いた時には、まだ直接の担当者が来ておらず、その場にいた者が、当日の飛行予定表のようなものを見て、その飛行機はシャルル・ド・ゴールから出ると言った。そんなはずはない、とすつてもんだ。しかし結局、急遽、タクシーでシャルル・ド・ゴールに向かった。シャルル・ド・ゴールでは、いやいやオルリーだということになり、もう一度すつてもんで、しかし今度はかなり激しくすつてもんで、また、オルリーに戻った。8時半のフライトだったので時間的には問題なかったが、なにかエジプトの神々に悪戯されているのではないか、これは、エジプトに行くなというサインではないか、という感じさえ持ったのを思い出す。エジプトから戻り、クレームをつけたところ、結局、この「ご迷惑」に対し、800フランの慰謝料+タクシー代と今後当社のツアー全て5%引きの特典がでた。なお、昨年、エジプトではなんとも痛ましい事件が発生した。全くイノセントな邦人達が巻き込まれたことに、心底、怒りを覚える。

一昨年に比べると今回のケニア探訪はなんと平穏無事なことか。おや、隣に座った人は、どうもむち打ちらしい。すごく姿勢のいい人が隣にいたと思ったが、シートベルトやヘッドフォンのセッティング、食事の時も顔を正面に向けたままなんとかやっている。あれは、すごく大変そうだ。お大事に。でも、もし、そのまま踊ることができたら、あなたは、モダン・ダンスのチャンピオン。

水慣らし

1月9日 未明。キリマンジャロ空港に寄港後、モンバサ・モイ空港に到着。

現大統領の名を冠したモイ空港では熱帯特有の大粒の雨が降っていた。パリで軽い雨に慣れていたせいも、それだけで熱帯に来たのだという実感が湧く。タラップを降りる際に、雨合羽代わりにコートを着たが、なにやら洗礼の儀式を受けているような感じだ。空港ロビーで、生まれて初めて本物のタガメを見た。大きい。これなら、メダカくらい簡単に食べてしまいそうだ。空港は荷物や人が多数行き来するので危ないのだが、不幸にも、恐らくスーツケースのカドか何かで胸からギロチンにされてしまったタガメが、それでも前足を動かして必死で移動しようとしているシーンが強烈に印象に残った。夢に見そうで怖い。昆虫の頭部は抑制の機関であることから、交尾の円滑な継続のために雄の頭を切り落としてしまう実験やカマキリのように交尾の最中に雄の頭を食べ始めてしまう雌などの話を思い出した。

その旧名が「戦いの島」を意味するモンバサは、ケニア第2の都市と言われる。が、例によって途上国とはかくもひどいものかと実感する。空港からホテルに至る道路沿いには、4本の角材による柱と継ぎ接ぎのトタン屋根だけでできた粗末なお店が散在している。「軒を連ねる」という表現があるが、ここでは軒らしい軒もないし、それを連ねることができるほどのお店もない。商品は、二足三文でも売れば本望といった感じのものが多く、例えば、子どもの頃胸をわくわくさせてくれた駄菓子屋さんのような感じだ。いや、それでは駄菓子屋さんに失礼かも知れない。炭を大きな白い袋に詰めて売っている店もある。小学校の体育大会の時などによく使われるテントを送れば、それで助かる人がたくさんいるのではないだろうか。鉛筆やボールペンを1万本位送れば、ケニアでは末代まで語り継がれるほどにありがたられるかも知れない。道は最悪の状況。道の穴に溜まった泥水で足を洗う者などもいる。下水処理などは推して知るべし。2人組の警官を3度ほど見た。とにかく貧しいこの国では、生きるのがやっとなという気になる。もののけ姫（宮崎アニメ）に、「生きる」というセリフがある。このセリフ、この国では、哲学とか思想とか高次の精神的なインプリケーション抜きに、文字通りの意味で、大切な教えになるのではないだろうか。なんだか黙って運命を享受するだけという日常を送っていると、死んでしまいそうな気がする。知人がインドに行った時に体調を崩し、このまま死ぬのかと不安になったことがあると聞いていたが、ここで体調を崩してもやはりそう思うだろう。モンバサ島から、5分ほど海（インド洋）を簡素な造りのフェリーで渡る。現地のスラムと海によって隔絶されることで犯罪の可能性が減るのではないかと思いき、正直ほっとするが、実は渡った先にもスラムはあり、これはぬか喜びに終わった。しかし、日本ならこの距離でこの需要があれば、あつと言う間に橋を渡しているだろう。国の貧しさか、それとも、とんでもなく荒れる地形なのか、あるいはなにか政治的な背景があるのか。上陸後40分ほど車で走るとサザン・パーム・ホテルだ。今日は移動後の調整日で、ここの285号室に一泊することになる。中庭にある立派なプールを通り過ぎて部屋に向かう。おっと、40cm位のムカデや大きなアフリカマイマイやらの出迎えを受け、背筋がぞくつとする。バオバブも見える。アフリカだ一、と内心で叫んだ。すれ違う従業員から「ジャンボ」と声をかけられるが、どうもまだ「ジャンボ」と即座に応えるのは気恥ずかしく、「ハイ」とうなずきながら返答する。部屋にチェックインしてまずすることは、蚊取り線香を焚くことと決めていた。オイルライターで火を点ける。ああ、この香り。夏の日本が懐かしい。そう言えば、日本では正月だ。丸二年も正月を祝う習慣のない西洋にいて、お正月のあの雰囲気、神社や露店、そして気分が清々しく一新する、が特に懐かしく感じられる。各部屋には三菱(!)のクーラーと蚊帳が備え付けられている。窓の上の方はスリットになっている。クーラーを利かせるために、これを閉じる。シャワーは、下が荒いコンクリート仕立てでもあり、ビーチサンダルなどをはいて浴びるのが適当だろう。今後も使うかも知れないので、ホテルの土産物屋で300円位のビーチサンダルを買った。これはシンプルなサンダルで、もう20年位前にならうか、私が沖縄にいる頃使っていたものと同じだ。トイレトペーパーと石鹸が見あたらない。前者は持参しており問題ないが、シャワーでは水を浴びただけだった。手拭き顔拭きにウエットティッシュが活躍する。アフリカのホテルでは、トイレトペーパーも備え付けないのか、と思ったが、これは担当が忘れてらしい。その後、ホテル内の土産屋でポストカードなどを買ってブラブラする。日本までの切手を買おうとしたが、店員は日本までいくらかかるのか知らない。私が初めての日本人客ということもないのだろうが、彼女は、アメリカの方がフランスより遠いことと、日本はとんでもなく遠いということ以外に情報がなく、この2つの情報から、きっとこの位とあって、49シリングとはじいた。別に切手代など払いすぎても苦にならないが、足りないのはこまる。日本まで無事につけばよい。ビュッフェ形式の夕食では、一応生野菜は避けた。ビールは一般にぬると「地球の歩き方」に書いてあった記憶があるが、ここのはよく冷えており問題

はない。ドイツ人客も多いようで、変なビールは出せないだろう。なお、ドイツ人はアフリカ人女性目当ての客が多いとのこと。けしからん。モンバサはとにかく蒸し暑く、よく眠れず疲労がたまる。

野生の王国

1月10日 アンボセリ国立公園

朝5時頃にモンバサのホテルを出発。8人ずつのグループに分けられ、トヨタのワゴン車でキリマンジャロの麓にあるアンボセリ公園に向かう。かつて、動物保護区時代には、3248km²と東京都の1.5倍の面積があったこの公園は、1974年に国立公園になるときに392km²になってしまったそうだ。私は、助手席のすぐ後ろに座った。同乗者は、ハネムーン1組、子連れ1家族3人、おばさま2名。500キロ位の行程とガイドのラシッドがいう。彼はアラブ系ではないか。「インシャラー」が口癖であり、直接聞くことはしなかったが、イスラム教徒の可能性は高い。だとすると折しも折り、ラマダンで時に機嫌が悪いかも知れない。ナイロビとモンバサを結ぶ、この国にとっての大動脈とも言える道を通ってアンボセリに向かうが、実にワイルドだ。自動車道を自由にゆらゆら人が歩いているところなど、なんかアフリカーという感じがする。後日、1月19日付けのヘラトリ紙で知ったが、丁度我々がモンバサから帰路の飛行機に乗った頃、まさにこの道路は、豪雨により橋の一部が流されるなどして通行止めとなり、また、大変痛ましいことに死者も90名近く生じたそうだ。その後東アフリカ史上最大級の交通渋滞、ツアボ国立公園付近で25キロ、を経験したという。我々は、非常に幸運であった。日頃の行いは、最近決して良くないが、これに感謝して、少しは、世のため人のために精を出そうと思う。

道中、ライオンのプライド（小さな群）を見た。実は、この時私は居眠りをしていた。時々、窓に頭をぶつけて後ろの5歳くらいの女の子に笑われていたが、これは、partly because悪路のせいなのだ。ややあって彼女が、「リオン、リオン」と叫ぶので、外を見ると、ライオンだった。ケニヤ第1とか随一の幹線道路の両脇をライオンが歩いてゆく。How wonderful! 土産物屋で、仮面を買った。4000ケニヤシリング（8000円くらい）と高い値で買った。なにより、仮面の面構えが気に入ってしまったのだが、日本語を多少知っていることと、この国のあまりの貧しさから、8000シリングという最初のオファーを半分にしただけで、了解した。相場は2000~3000シリング位ではないだろうか。

突然に、それは姿を現した。富士山のようにすそ野が大きく広がる。火山である。いまはお休みのようだが、あれが噴火した時など、さぞかし壮観だったろう。標高5895mの頂上は、タンザニアにある。雪を頂くというその付近は、残念ながら、雲に覆われておりよく見えない。あの山に登頂できたときの達成感、充実感、満足感ほどれほどのものだろう。ただ、残念なことに、高山病などで命を落とす人も少なくないと聞く。私とその頂に立って、はるか下界を見下ろす、などということはないだろうが。数ヶ月後の話になるが、同僚のフレデリック女史が、この山の5400m付近まで登ったそうだ。5600mまで登るとなによりやら証明書をくれるらしい。彼女は、ガイドがあまりにもゆっくりと歩くので、自分のペースで歩かせてくれと頼んだ。ガイドはやめなさいと言った。しかし、あまりに遅く、足がぶつかるので、もう一度頼み、それほど言うならどうぞ、ということで自分のペースで、もちろんゆっくりとした歩調だが、歩き始めた。10歩進んだ。そこで彼女は一步も歩けなくなり座り込んでしまった。ガイドは、全てを知っているのだ。

アンボセリ国立公園に入った。地の果てまで続く草原。ところどころに散在するアカシア。キリマンジャロをバックに、ガゼルやシマウマ、そして数え切れないほどの草食動物達が、悠々閑々と草を食む。あまりにも雄大過ぎて言葉がない。視界を越えてどこまでも広がる野生の王国。ああ、実に気持ちがいい。絵心があれば、腰を下ろしてゆっくりとスケッチでもしたいところだ。しかし、広すぎて視点をどこに据えて良いのか、迷ってしまう。

まず一群の象が、我々を迎えてくれた。四〇頭ほどの群で、ゆったりゆったり車道を横切っていく。動物園のものとは、別種の生き物と思われるほど色彩の印象が異なる。黒っぽい体色を背景に真っ白な牙が浮き上がるほどに鮮明だ。野生の象は、日々牙を使うために、その結果これが磨かれて、あのように鮮やかな白色となるのかもしれない。この巨大な存在が、ただ一個の生命体だ。それが群を成し、空間全体に圧倒的な迫力を持たせながら、ゆっくりと移動してゆく。象は、遠くにある時にその大きさをより実感させる。彼らは、他の多くの動物がそうであるように、動く点にはならない。どんなに遠くにあっても相当の面積のある黒い陰、それが象だ。当初はしゃいでいた我々も、象の群が車の間近を横切ろうとする時には、自然と息を飲んでおとなしくなっている。大なる生命体にただ威圧された。

アンボセリ公園に入るとトムソングゼルやらなにやらがたくさんいる。やはり、多数のガゼルを見るとはるばるアフリカの野生の王国に来たという実感が湧く。ガゼルの瞳は、とてもきれいだ。肩までの高さも60cmと小柄で、ペットにして飼ってみたいくなる。まだ角が短いものなどは、「小悪魔」と言った感じだ。いつも短いしっぽをプリプリと振っているのも実にかわいらしい。トムソングゼルは、アフリカに100万頭いると言われる。主な生息地は、ケニア／タンザニアの国境付近とスーダン南東部からエチオピア南西部にかけての2カ所がある。余談だが、In the country of Gazelles を書いたFritz R Walther氏によれば草原でガゼルを観察する際のポイントは3つだそうだ。その1、観察地点に入ったら車を動かさないこと、その2、車から出ないこと。彼は2日や3日という間、生理的な要求のある場合を除き、車の中にステイして観察を続けたそうだ。その3、何か目立つものの陰に車を止めること、もし何も無い草原で車一つだけあるような場合には、ガゼル以外にも皆警戒して近寄らなくなるそうだ。なお、音については、ガゼルについては人間の大声にすぐに反応して逃げる、ということはないらしい。しかし、車がのろのろ運転でやぶのトゲなどをひっかけて音を出すと、途端に逃げ出してしまうと言う。インドにもガゼルがおり、外見は、グラントガゼルに似ている。アフリカでは雨期の終わりにかけて出産のピークがある。このトミーの赤ちゃんは、188日お母さんのお腹で過ごした後、2-3キロの重さで世に出る。大人になってからの体重は、ヒ・ミ・ツらしい。が、一説によると15-25キロ位ようだ。ちなみに、ざっと身長5m、体重1トンのキリンと比べると、トミーの子は、小さい。キリンさまの子どもは450日の辛抱の後、100キロまで育って、ドサン、と2m位の高さのお母さんのお尻から落とされる。どちらも赤ちゃんは成体の10分の1位だが、人間様は、例えば私の場合だと、20倍以上大きくなっている。他のお仲間はどうだろう。まずチンパンジーは、2キロ弱が30-55キロに、ボノボは、1.5キロが40キロに、ゴリラは、赤ちゃんは2キロだが、これが大きな雄で180キロ（90倍!）、大きなメスで100キロまで育っている。そういえば、パンダは小さく生んで大きく育てる典型で赤ちゃんは100gから100kgと1000倍になるのだ。ゾウは、120キロの赤ん坊が、雄で、3トンくらいまで成長する。ゴリラなみの割合で育つと10トンにもなってしまう。以下発想は、恐竜の方にシフトしていくが、3キロの卵から30トンの生体まで育つとすると、1万倍!よくそこまで大きくなれたものだ。恐竜の場合、細胞は成体になるまで何回分裂したのだろう。

昼食は2時頃だったか、ロッジに到着後8人席で取る。このロッジには、石鹸もトイレトペーパーもついておりno problem。没问题。あてがわれた12号室では、まず、蚊取り線香。特にシャワールームには、蚊が潜みやすいらしいので入念に煙を充満させる。ろうそくが部屋に備え付けてあり、うれしくなって特に意味もなく、火を点けてみた。火遊びが好きなのは、子どもの頃から治らない。夕食は少し時間をはずして、サファリガイドをばらばら眺めながら、一人でゆっくり取るようにした。今回なんとなく8人ずつの車のグループで行動しているが、恐ろしく英語の出来ない連中ばかりと一緒にになってしまい、私は私で、恐ろしくフランス語が出来ないアジア人であり、食事を一緒に取ることは遠慮した。彼らもその方が気が楽だろう。残念な気もするが、今回の唯一無二の目的「野生の王国を全身で感じること」に専念しよう。

蚊帳を下ろし、床に入りまどろんでいると、突然、とんでもないことを思い出してしまった。モンバサのホテルのクローゼットにブルーのジャケットを置いてきてしまったのだ。あ痛一。いつもポケットの中に、財布など大事なものを入れているが、どうだっただろう。ポケットの中は確かカラにしたはずだ。いくら、病気や泥棒対策、食料や水といった非常事態への備えなどに全力を尽くしても、こんな忘れ物をするようでは、...。 シャンゼリゼ付近のお店でソルドの時に買ったのだが、お気に入りだっただけに痛切な自己嫌悪で眠れない。ま・ぬ・けだ。やむを得ず自分を納得させる理由を考えた。例えば、今回の旅行はシーズンをはずせたために3000フランほど安く上がっていることを考えれば、... 本当に貧しい泥棒の手に渡り、うまいことそれがサバけてしばらく彼がカセギをしなくてすむことで他の被害者がでないようになるのであれば、...

しかし、いずれにしても明朝一番でホテルに電話をしよう。

ああ、ちびまる子ちゃんのお母さんならきっこう言うだろう。「お婆か!」

ごもつとも。

獅子の郷

1月11日 ナイロビ経由でマサイ・マラ国立保護区へ

朝早めに準備をし、6時頃フロントで電話を借りようとしたところ、「当ロッジの電話は太陽電池で動くため、午後になり日が高くなると使えない」とのこと。蓄電はできないのかと思ったが、まあ、ひたすら耐えて。自分はその頃には、ナイロビ辺りにいるだろう。電話番号だけでも調べておこうと思ったが、フロントの女性は、このロッジには電話帳を置いてないという。実はたまたま、ロッジ内で自力で電話帳を見つけだしたが、それに探しているホテルの番号は載っていなかった。電話帳を見つけたところに、日本語の本があった。アフリカによく写真を取りに来る日本人父娘が出版した子供向けの写真集だった。一層の御活躍を。ケニア一国のすべての電話番号がそれほど厚くもない電話帳一冊に収まっているが、これも国の状況を示している。ガイドにジャケットの件を話すと、彼は、無線でナイロビの本社に連絡してくれると言う。他にも何か忘れ物をした人があるようだ。旅行の最初と最後に同じホテルに泊まるのは、こういう時に都合がよい。

このアンボセリ公園では、象、シマウマ、「小悪魔」トムソングゼル、ヌー、ハイエナなどが容易に見られた。しかし、キリマンジャロをバックに悠々と草をはむなんぞは、まったく雄大で実に気持ちがいい。絵心があれば、スケッチでもするのだが。しかし、そうも言っていられないかも知れない。今回のサファリは、迫り来る大雨と競争しているように、余裕を見て前倒し、前倒しでややタイトなスケジュールになっている。

次の目的地は、ケニア第一の野生動物数を誇り、特にライオンが多数生息すると言われるマサイ・マラ国立保護区。アンボセリと違って国立公園ではない。その違いは、．．．いい質問だ。この位の質問には答えられるようになりたいものだ。その総面積1672km²は、大阪府全体の面積に近いとか。ナイロビ経由で向かう途中、有名なレストラン「カーニボア」で昼食をとった。ポーク、チキン、ソーセージに始まり、ビーフ、マトンを経て、インパラ、ガゼル、ダチョウなどを食べた。インパラが、一番おいしかったかな。思えば、これまでいろいろなものを食べさせてもらった。オーストラリアでは、ラクダバーガー、クロコダイルピラフ、カンガルーステーキ、それからエミューも食べている。大好きな動物達に会えて実にうれしいのだが、同時にそれらをうまいのうまくないのといって喰らっている。人間と動物の関係は、どうしてもこういう罪深いものにならざるをえないのだろうか。同乗しているフランス人家族が、インパラやガゼルの肉を拒否したが、かわいそうと思つてのことだろうか、なじみがないからだろうか。

途中、土産物屋で、ガイドブックを購入した。割り引きするから、他の物も見てくれと言う。この本にしか興味がないと言うと、結局3割弱割り引きとなったが、どうも店員の態度がおかしい。在庫管理が甘く、知らぬ内に1冊紛失したことにできれば、その分の代金は、彼のポケットマネーとなる。どうも彼はそれを目論んだのではないか。何か悪事に荷担したようで、若干後味がよろしくない。しかし、本自体は素晴らしいもので、興味深い。参考までにタイトルは、Spectrum guide to African Wildlife Safaris。この中にある、物憂げなチンパンジーの顔のアップの写真が何とも言えず実にいい。また、巻末のケニヤ、タンザニア、ウガンダ等8カ国の公園でどの動物が生息しているか、どの程度見やすいか等を示した一覧表は、とても参考になる。

道中、雨が降ったりやんだりするが、ある幻想的なシーンを忘れることができない。車の天井は、上に持ち上げるようにして開けることができ、ここから時々頭を出しては、角度の違う風景を楽しんだ。ある時、なにげなく後方を振り返った。なんと二重の虹が、といつても普通気付かないだけで二重の方が多いらしいが、地平線のやや暗い雲をバックにルドンの絵のような怪しげな雰囲気醸し出していた。地上では、みずみずしい緑の草原にあってシマウマが数頭、ブラックとホワイトのストライプを鮮やかに映えさせながら、微動だにせず虹の方を見ている。まるで、その虹の微かな声を聞かんとしているかのようだ。自然の織りなす光景は、時として震えるほどに美しい。

ところどころ道が悪く、時に他の車の助けが要ることもあるようなので、同じツアーの他の車と歩みを一にしつつ進むことになった。我々のドライバー、ラシッドは運転がうまい。他の車が皆泥にタイヤをとられて動けなくなってしまうところでも、彼はなんとか切り抜ける。見ていると、どうも彼が先に走って他の車のために道を作ってやるケースが多いようだ。雨のラシッドと呼んであげよう。いや、もちろん晴れの日もラシッドだ。そして、彼の過酷なドライビングの要求に期待以上の能力を持って応えてくれるのが、このトヨタ車なのだ。トヨタはここでも偉い。そうこうしている内に陽が沈む。我々は先行しすぎたため、あるところで少し待つことになった。皆、なぜか外に出たがっているようだ。ラシッドはもう外に出ている。乗降口に一番近く、いわばドアの係りとなっている私としては、無言の圧力を感じ

じたならば、彼の判断を信じドアを開けるしかない。もちろん、私が降りる必要はないのだ。笑顔でドア開けのサービスだけをすればいい。その時... カメラの紐を左手に絡ませていたことを忘れていて愛機ゼンザプロニカを落っこしそうになった。いや、わざわざ記録するほどのことでもなかった。結局私も外に出てみた。

アフリカの闇と静けさは騒々しく現れた人間どもをものの二分ほどで、すっかり包み込んでしまった。

雲の切れ間にはなにやら妖気を帯びた月が見える。アフリカでは月にさえ不思議な生命力を感じる。陽が落ちたからといって、家に帰るわけでもなく、そこら辺で「野宿」している数多くの動物を見ると、やはりここは野生の王国なのだ、と改めて思い知らされる。

気配。

不思議な感じがする。生き物の気配が、既に暗い地平線の果てまでも満ち満ちているようだ。数百メートル位のところには確実に何かがいる。ゆっくりと動いているような音が聞こえる。シマウマかなにかだろう。まだ何か食べているのかも知れない。もっと離れたところからは、時折、ヌーの声が聞こえる。就寝の挨拶でもしているのか。気付かないだけで、足下ほんの数メートルのところにも、何かがうずくまっているかも知れない。数え切れないほどおびただしい数の生命のただ中に我々がいることをはっきりと認識した時、震えるほどの緊張感を味わった。

日没後2時間ほどして、雨の中マサイ・マラのフィグ・ツリー・ロッジに到着した。そのまま、まず夕食をとってから、各自チェックインとなる。吊り橋をわたって行くところがおもしろい。この時はよく見えなかったが、翌朝見ると吊り橋の下では、赤土に濁った、意外に大きな川が勢いよく流れていた。テント形式、T34号室。部屋にたどり着くまでの道がややこしい。一時小さな鞆が紛失し、あせったが、車に残っており助かった。キーコイとかいう赤い民族衣装を着て、前髪に飾りを付けたおしゃれで長身、ハンサムなマサイの若者(24歳)と話した。彼は、フランス人が英語を話さないことを愚痴た。あなたは、フランス人とは違うようだから話しかけてみた、と言う。さよう、私は、モンゴロイドである。日本と言う国に生まれ育ったが、始祖チンギス・ハーン以来、正統な血筋のみに伝わるといわれるこの肩の蒼き斑点にかけて、いつの日か史上最大の世界帝国を復活してみたいと思っている、というホラは吹いていない。初対面の人なので控えた。チップを欲しそうな素振りなど微塵もない。笑顔が明るく印象的だった。なお、マサイほど有名ではないが、ケニアの5人に1人は農耕を営むキクユ族の出身で、ケニア建国の父といわれる初代大統領ジョモ・ケニヤッタは、この部族の出身だ。ジョモとは、「燃える槍」の意味だそうだ。彼の作品に「ジャングルの紳士達」というショートストーリーがある。以下は、そのあらすじ。

昔、昔、象と人間はお友達同士でした。(ああ、なんとのだかな出だしなんでしょう。とても最後のオチなど予想できない...) 嵐が荒れ狂うある日、男の小屋に象が来て言いました。「私の鼻を、あなたの小屋に入れさせて下さい。」「いいですよ。」男は言いました。「どうも有り難う、御恩は忘れません。後できっと恩返しをします。」象がいました。ところが、象は鼻だけでなく、体全体を押し込んできたので、男は小屋の外にはじき出されてしまいました。腰を落ち着けると象は言いました。「友達よ、あなたは私より丈夫な肌を持っている。どうぞあなたが外で雨に打たれて下さい。」「それは、おかしい」と男は文句を言い始めました。嵐が治まった頃、ジャングルの王様ライオンが来て、「ワシの王国で騒ぎをしているのは誰だ？ ワシの王国では平和が一番大切だ。それを破るものは許さない。」と言いました。象は、この王国の大臣でした。それも、R t. H o n. つまり閣下と呼ばれるほどの高い身分のです。象は言いました。「王様、騒ぎではありません。ちょっと議論をしていただけなのです。」

ライオン王は言いました。「それでは、調査委員会を設置して真相を解明させよう。」

男は、この処置にとっても喜びました。調査委員会はきつと真相を解明して、すぐに象を小屋から追い出し、自分のもとに返してくれるだろう、と。調査委員会は、狐閣下を議長として、サイ、バッファロー、ワニを委員に、そして豹を事務局として設置されました。男は、この構成に不服でした。しかし、委員の面々は公正無私であるといううわさがあったので、それを信じて従いました。まず象閣下が呼ばれて、証言します。

「ジャングルの紳士の皆様、お時間を取らせて申し訳ありません。事実は皆さん既にご承知の通りですので繰り返しません。私は、この友人の小屋の、まだ、未開発の空間を経済的に使おうとしただけなのです。同様の状況では皆さんもそうしたでしょう。」象のこの証言をハイエナ氏らが支持しました。次ぎに男の番になりました。男の証言はすぐに議長に遮られました。「象閣下の証言は、他のいろいろな者によってその正当性が証明された。あなたは、あなたの小屋の下で象閣下が占めた、まだ未開発の空間が、それ以前に誰かに開発されていなかったかどうかだけを答えればよい。

」

男は、「いいえ、しかし．．．」そういいかけたところで、委員会の面々は象閣下の主催するランチをとり、評決をするためにいなくなっていました。さて、評決です。「男よ、このトラブルは、あなたの後進的な考えによって引き起こされた誤解が、そもそもの原因である。しかし、双方ともに妥協の余地がある。したがって、象閣下には、その小屋の占有を認め、あなたには、その周辺で新たな小屋をつくる権利を認める。」

男は、他に手だてもなく、また、委員会の面々の牙や角が怖くて、新しい小屋を造りました。すると、今度はサイが来て居座ってしまいました。調査委員会の設置、証言、評決と同じ事の繰り返しです。別の小屋を建てます。すると、バッファローが来て、ワニが来て．．．同じ事が延々と続きました。男はつぶやきました。「Ng' enda thi

ndagaga motegi (このうらみ、はらさでおくものか)」(ちょっと訳しすぎかな。「おごれるものは、久しからず」位かな。英訳では、there is nothing that threads on the earth that cannot be trapped)

しばらくすると、これまでに男が建てた小屋が腐り始めました。そこで、男は、とびきり大きな小屋を造りました。サイがその大きな小屋に入り込もうとすると、もうライオン、ゾウ、バッファロー、ワニ、ありとあらゆるジャングルの紳士達がすでに居座っています。その内に喧嘩が始まりました。その時、男は、小屋に火をつけて皆を殺しながら、言いました。「平和にはお金がかかる。が、それだけの価値はある。」その後男は、幾久しく平和に暮らしましたとき。

しかし、政治家だけあって、すさまじいばかりの欧米からの独立思想だ。

私は、もう少し穏やかな、こんな結論を用意しよう。

(調査委員会の設置まで概ね同じストーリー)

調査委員会では、キリンが証言しました。

「あっしは、ご覧のように背が高く、遠目が利きます。あのひどい嵐の日、象閣下は、小屋に入って行ってしばらく動きませんでした。雨宿りでもしていなさるのか、と思ったんですが、よく見ると小屋の辺りが赤く染まっていくんでさあ。どうも閣下の鼻と尻尾から血がにじんでいるようでね。その鼻と尻尾を見ると、小屋の柱をしっかりと掴んでいなさる。ははあ、これは、小屋が嵐でペシャンコにならないように、ふんばっていなさるのだ、とそう気付きました。あの嵐では、あんな小屋はひとつたまりもなかったでしょう。中にいりゃあ、小屋がつぶれた時に、おだぶつだ。」

男は涙が出てきて、象閣下に何度もお礼を言いました。

象閣下は、耳をぱたぱたと動かして、「いいんだよ、私の友人。」と言いました、とき。

このマサイ・マラ保護区では、「小悪魔」に加え、より白っぽく大きいグラントガゼル、スワヒリ語でキリン・カモシカといわれるように首の長いゲレヌク、足とお尻などに黒いあざのような模様があるトピ、1頭のオスが30～40頭の位のメスと群をなすインパラ(あふれたオスは、オス同士で群を作りハーレム奪取の機会をうかがうそう。しかし、さしずめ中国の皇帝と言ったところだろうか、両手両足を各1人ずつに揉ませ、左右に団扇でゆるゆる扇ぐ係りを配し、歌1人、踊り4人、楽器4人、酒の係り2人、この際、耳搔きをする係りも1人つけよう。至高なる悦楽の極地。しかしこれでもまだ、インパラの王様には遠く及ばないのだ。)といったアンテロープが実にたくさんいる。有名なスプリングボックというのもこの仲間で、ピョーン、ピョーンと気持ちよさそうに、しかしそれでいて驚くほど凄い距離、高さを跳ねる、と見てきたようなことを言うが、実は見ていない。あんなに跳ねられたら、楽しいだろうに。このスプリングボックは、トムソンガゼルによく似ているが、トミーより、少し大きく(肩が少し高い)、角の形が違う。トミーは、ほぼ「まっすぐ」だが、ボックの角は、先がトピの角のように、先の方で一旦外に向いてから内側に向いている、またボックの顔は公家が化粧をしたように白く、目から口の先まで黒茶色の線がある、とまた見てきたように言うが、実は見ていない。というのもこのボックは、ナミビアやボツワナといったアフリカの南の果てにいます。農家の選別飼育によって、真っ白なボックとか、真っ黒なボックもあるらしい。先のガイドブックによればこれらのアンテロープは、アフリカに54種類もいるという。彼らは、蹄の数から偶蹄目と言われる仲間である。厳密には、体重を支えるのがどの指とどの指だとか、偶数本の指のある奇蹄目もいたとかいう話になるが、そんな話はパスしよう。突然、義経(ご存じ牛若丸の元服後の名乗)の話をする、彼は、一の谷だったかから平家を奇襲した時に、この蹄のことに触れているそう。これから駆け下りようとする崖があまりにけわしく、弁慶ですら尻込みするほどだった。義経は、鹿の獣道があることを引き合いに出し「鹿はこの崖を上り下りしている。鹿と馬の違いは何か。それは、鹿の蹄

が先が割れていることに対して、馬のは丸いことであることだ。鹿にできて馬に出来ないことはない。」と部下に諭した。「そんなけつたいな。馬と鹿を一緒にするなど、無茶ですわ。」と弁慶が言ったという話も聞かないし、ましてや、ものごとの区別を付けずに無理を押し通すことをこの故事にならって「馬鹿をする」というようになった、という説も聞いたことはない。余談だが、義経はその後、この崖から馬を2頭無理に落とし、その内1頭が助かった（無事に駆け下りた）ので、「ここに運が一つある。」といったそうだが、何とも強烈なことよ。さて、偶蹄目は他にキリン、カバ、バッファローなどがあるが、奇蹄目よりうまくやっている感じがする。奇蹄目の代表は、馬とサイである。例えば、足跡は蹄の跡でもあるが、足跡が2つか4つの部分からできているか、1つか3つの部分から出来ているかで、見分けられるらしい。馬は、人間で言うと手足の中指だけで全身を支えていることになる。けなげな感じを受ける。サイは、あの風貌に似合わず、とっては失礼かも知れないが、三つ指でございます。恐らくマサイには、そんな分類は関係ないだろう。自分たちを襲うか、襲わないか、食うとうまいか、うまくないか、そうした分類をしているのではないだろうか。なお、象は独立した目を作っているが、彼らも骨格の構造は基本的にはつま先立ちで、脂肪のハイヒールがあるために、ベタ足に見えとかいう風聞に接したことがある。トピのオスはよくアリ塚の上に立ち、辺りを監視しているとか。アリ塚の奥は深い。一度物知りそうなフランス人に勧められて、少し壊れたアリ塚の穴から、60cmくらいの草の茎を落としてみた。スーと吸い込まれた。うわー、どの位深いのだろう。トピさん落ちないように。ヌー(wild beast)とトピらは、前足(肩)が高いという特徴があり、シルエットを見ると一層はつきりする。ワイルド・ビーストは、ちょっとしたことですぐに気が高まり走り出したりするので、この名がついたらしい。この仲間に、ハートビースト(hart beast)というのがある。あるガイドブックは、ぶ細工だ、と言う。アンテロープの名折れだ、とか、優雅でない、とか、角の形が悪い、とも。確かに、そうかも知れないが、そんなことは、いいじゃん。好きな動物を「好き」というのは、いい。しかし、ある動物の見てくれが悪いのどうのと言うような人は、動物好きという点からは、偽物だな、と思う。生物は多様であることが、美しいのだ。多様であるから、興味深いのだ。その意外性が、いいのだ。動物好きなら、こうした様々な生命体と時空を共有していること、平たく言えば、一緒に生きているということにまず、無限の感謝の気持ちが湧いてくるものではないかと思う。

野生の掟

1月12日 マサイ・マラ国立保護区

朝6時半の予定時にフロントに行った時には誰もおらず、フランス人の行動傾向を学んだ者として、彼らはまだ皆寝ているに違いない、と見た。従業員に聞くと、フランス人はみんな寝ていると繰り返す。英語の語感をより正確に表現すると、「フランス人、みーんな寝てる、みーんなみーんな寝てる」となるだろうか。そうだろう、そうだろう。今日は、朝食前、昼食前、夕食前の3度のツアーが計画されていたが、ほとんどのフランス人が朝寝坊をしたために、結局1時間遅れくらいでツアーが始まった。このため朝食時にはロッジに戻らず、そのままツアーを継続した。が、今日は、思いもかけず自然が繰り広げるドラマの一つに遭遇した。

ガイドが、車を止めた。双眼鏡を貸してくれと言う。老婦人が貸す。私も愛用の双眼鏡（この双眼鏡については「大雪山夢想録」で述べたものと同じ物。未だ健在だ。）でガイドの見ている方を見たが、見当がつかない。ガイドはしばらくすると、やおら、車を動かし始めた。スワヒリ語だろうか、無線でなにか連絡しあったようだ。5分位すると、車の方向を変えた。何か、敏感な動物に遠巻きに近づくようだ。

・・・見えた。

立派なオスのライオンが2頭。敏感なところか悠々と昼寝をしている。昼寝とはこういう風にするものだ、とでもいわんかのようだ。そのまわりを、ホモサピエンスの一群（コーカソイド約30人、ネグロイド4人、モンゴロイド1人）が、何台かの四角いうるさい乗り物に乗って、取り囲み、観察し始めた。あの2頭はきっと兄弟に違いない。ヨーク観察したが、顔や全体の大きさ、毛並みなどがそっくりだ。トビが何頭か少し離れたところを通った。ライオンを発見し、以心伝心の会議が始まる。「大丈夫そうだけど、一応逃げようか」、「そうしよう」、結局「でもゆっくり、そおと逃げよう」という結論に達し、彼らはその場を去った。

象だのキリンだの動物園でおなじみのはずの動物も野生のものを見ると、何か違う感じがする。日本の動物園では、見る方のこちらが、優位とでも言おうか、に立っている。人間様のお陰で、差し当たって生命の危険もなく、食べ物の心配もいらない彼らは、周囲を警戒する必要がない。のんびりと、我々に見られるまま、生かされるままに生きているだけの存在、と言ってしまえば言い過ぎだろうか。野生の動物は、常に生命の危険にさらされながら日々を生き抜いており、この点、彼らの方が何かたくましく先輩格に見えてしまう。ここでは、我々が見られている。群を成す動物が一斉にこちらの方に顔を向け、耳をそばだてている時やキリンに上の方から覗き込まれるように見られている時に、特にその思いを強くする。なお、キリンには特に有名な亜種だけで3種ある。詳しく見ると、諸説有るかもしれないが、私のガイドブックは8亜種説をとっていた。私はマサイと呼ばれる種類が好きだ。模様が格好いいのだ。この他、アミメ種と膝下の白いロスチャイルド種などがある。後者は特に少なくなっているようだ。

黒サイには二度お目にかかれた。非常に幸運なことだ、とラシッドが言う。サイは、密猟などで激滅しているだけに、私も今回野生のものを見られるとは思っていなかった。だから、彼が、サイがいるようだと言って車の方向を変えたときには、正直子供のようにワクワクしてしまった。昔、動物園で、サイが古タイヤで遊ぶのを見て、なんとお茶目な、と思ったことがある。サイは大きくてお茶目な愛すべき存在なのだ。しかし、彼らも滅びる運命にあるのだろうか。密猟の原因として日本人にも、その責任がある。イエメン人が、その角を、短刀に使うことも原因として指摘されている。この短刀、日本円に換算すると200万円くらいになるだろうか。これでは、密猟は無くならない。何かしなくてはという焦りにも似た想いに駆られた。

サイは、我々の方を向きしばし牽制した。やがて、威厳と寂しさを漂わせながら、ブッシュの奥深く消えていった。

その後、トムソングゼルの群の横でガイドが車を止めた。人間とは贅沢なもので、もうガゼルの群くらいでは満足しない。が、今回は違った。20頭ほどの群の向こうで、メスライオンが、一頭待ち伏せをしている。車からの距離は約40m。こんなに近いのに、トムソングゼルの目の高さでは、ライオンは見えないのだろうか。彼らは普通に草をはんでいる。今回、ビデオを構えて気が付いたことだが、白黒のファインダー越しだと、サバンナの動物は、極めて見つけにくい。幾度も目標を見失い、その都度画面を引いて、肉眼で確認して、また寄る、ということをや余儀なくされた。色彩の感覚というのは、食べられる果実（熟したかどうか等）とそうでないものを見分ける必要性から霊長類で特に発達

しており、その他のほ乳類は、色盲といわれる（なお、最近この分野の研究も進んでおり、例えば、牛は青と赤の識別が可能であるといったような実験結果等もあるらしい）。我々からすれば、ガゼルのお尻の真白な縦縞は、緑か、薄黄色の背景にあって非常に目立つ模様だ。ライオンの体の色も、黄色が強すぎる。しかし、色盲の動物にとっては、ガゼルにしるライオンにしる、お互いに極めて見つけにくいのだと思う。白黒のファインダーで唯一容易に対象を捉えることが出来るのは、それが、動いている時だ。だからだろう、アンテロープの子ども達は、ほとんどどうもくまったまま動かない。色というのは、実に重要な情報であることを実感する。

待ち伏せていたメスライオンは、静かに群との距離を縮めた。突然、右の方にいたガゼルが、左の方に飛び抜けるように駆け出す。他のガゼルも一斉にそれに続く。

メスライオンが、跳ねた。

凝縮された野生の掟がこの一瞬に始まる。

何かもつれ合うような動きが見え隠れした後、後ろから二番目について跳ね飛んだガゼルが振り回されるようにして地面に押さえつけられた。車中は驚きと感嘆の声に包まれる。来た。見た。撮った。メスライオンは、ガゼルの首を噛んだまま、ブッシュにひきずり入れた。ガゼルはピクリともせず、糸を切られた操り人形のように、ただ引きずられるにまかせている。あっと思った瞬間には、首の骨が折られていたのかもしれない。あの不思議な優しさをたたえた瞳のガゼルが、皮をかぶったただの肉の塊となってしまった。

・・・死。

突然に放たれた死神の矢。しかしこれが、生命の世界における、おそらくごく普通の死の訪れなのだ。肉食獣に食べられるという形での死は、今やほとんどの人間にとって無縁のことと言える。そればかりでなく、医学の進歩による延命行為によって、人間は他の動物とは全く違った死への道程を獲得している。一体、仲間が他の動物に食べられてしまうというのは、どういう意味を持つのだろうか。逃げ延びたガゼル達は、仲間の死を意にも介さないように、あまりにも淡々として見える。あのガゼルは、ライオンの餌食となることで、食物連鎖という、太古の昔から無限に繰り返されてきた自然の摂理の一つの役割を演じ切った。観光客は一つの動物の命が消えたことを、ただ見せ物を見ているような乾いた感覚で楽しんだ。それだけのこともかもしれない。これを重く受け止め、ガゼルの、いわば成仏や安楽死を願うなどというのは、センチメンタリズムに陥りすぎているかも知れない。が、もし、まだ生命の灯火が消えきらぬ内から腹を噛み引き裂かれ、想像を絶する断末魔の苦しみに喘ぐ中で死を迎えること、それが、実は極めて多くの動物が経なくてはならない生命として最後のイベントであるとしたら。これは、残酷な、あまりにも厳しすぎる野生の掟だと言わざるを得ない。天寿を全うするということが、文字通り、如何に有り難いことであるか、考えを新たにしたい。いったい、億兆の命の内、無事に天寿を全うできる命というものは、どれほどあるものなのだろうか。...

生命の奪い合いで成り立つ生命の世界。紛れもないその生命の世界で、ライオンの餌食となったガゼル。その肉体が他の命の支えとなるべく、容赦のない牙によって噛み裂かれ、引きちぎられる前に、死によって苦痛から遠く解放されていることを望むしかなかった。

ラシッドは、ブッシュの反対側からより近寄って見るべく車を回した。

そうすべきではなかった。昨晚の雨で地面がゆるくなっており、あろうことか、タイヤが泥にとられた。空回りしている。そのうちに、ゴムの焼ける匂いが立ちこめ、完全に身動きできなくなってしまった。少し遅れてきた他の2台も同様にはまってしまう。大変なことになった。肝が冷えた。デイバッグのアーミーナイフに想いを寄せる。いつも、こいつがあれば、なんとかなる実に頼もしい味方だった。いつぞや、丹沢かどこかの沢で15メートル位の堰堤の脇を登っていたときのことだ。釣り竿がからまって、進退窮まったことがある。このとき、スイス・ツェルマツトで購入したビクトリノックス製アーミーナイフが活躍した。なお、ツェルマツトは、ご存じマッターホルンの麓にあるいい感じの街で、確か電気自動車以外の車の通行を禁止する政策を取っている。最近、妙高高原町に救助犬（雪崩に埋まった人を助け出すことができる）を送ってくれた。偉いのだ。日本もこういういいことを少しづつでいいから積み重ねていく必要がある。さて、沢では三点で体を支持し、まとわりつく枝をのこぎりで切っては登り、切っては登りしてなんとか上に出た。何かの法に触れていたかも知れない。しかし、今回は分が悪い。小さなナイフよりは、カメラでも振り回した方が効果的だろう。ライターで何かに火を点けて振り回すのもいいかも知れない。いずれにしても、他の動ける車が助けに来てくれないことには、どうにもならない。ところがこのメスライオンなかなか気の利く奴で、少しすると席を外

してくれた。ガゼルをくわえたまま、遠くのブッシュの方に移動したのだ。小さくなる後ろ姿を拝むように見送った後、我々は、車からわーと降りて、はまっていた車を押し出して脱出した。男は、全員降りて車を押し出した。フランス人は一般に小柄だが、中には私より力のありそうな女性もおり、彼女らも車を降りて押すのを手伝った。以前日本のサファリパークで実に悲しい出来事があり、瞬時ためらわれたが、私だけ残るといのもたった一人のモンゴロイドとしてプライドが許さず、お守り代わりのオイルライターとナイフをシカと握りしめ、タオルを首にかけ、靴ひもをしっかりと縛って、空しい覚悟をして外に出た。もし、例のメスライオンがデザートを食べたくなって、ふっと戻ってきたら、我々はどうしただろう。いや私はどうすべきなのか。どうしたら、生き残れるか、よく考えた。飛行機の離陸時に行われるような、笑顔とジェスチャー付きの懇切丁寧な避難方法のご説明などは、一切なかった。君子危うきに近寄らず。もう遅い。こういう時には、八風吹けども動ぜず天辺の月だ。記憶が定かでないが、観阿弥、世阿弥の風姿花伝か武蔵の五輪の書が参考になるかも知れない。司馬遼太郎はどうだろう。犬も歩けばライオンも歩く。心頭を滅却しても獅子来たらば一目散。弘法も逃げるが勝ち。五十歩より百歩。急がば走れ。これだ。これぞ極意だ。こういう時に必ずいるのが、ライオンの鳴き声を真似して、仲間を脅かす輩だ。果たして、今回もいた。が、結構鳴き真似がうまい。もしや本物ではないか、と思ったが、2度目の鳴き声を聞いた時に声の主を確認して安堵した。君は、日本では江戸屋大猫を名乗れば、飯を食えるよ。真偽のほどは定かでないが、ライオンによる人命の被害は、マサイ族ではある程度の事例があるようだが、我々のガイドの経験では観光客ではないらしい。ライオンの目に車はどう映っているのだろう。もし、象やバッファローのように見えていれば、そう簡単に襲ってはこないと考えられる。バッファローは、一団となってライオンを撃退し、時に殺してしまうので有名だ。ただし、人さまの命を最も多く奪っているのもこのバッファローらしい。

勇壮無比、マサイ族

1月13日 マサイマラからナイバシャへ

7時集合、7時半まで朝食後、出発。例によって朝食は摂らず、ロッジの周りにいるベルバット（グリーンモンキー）をビデオに撮る。以前から感じていたが、どうもこの国では、いやこの国に限った事ではないかも知れないが、体の大きい人が上に立つ傾向があるのではないかと。現大統領しかり、現地旅行会社のヘッド、ガイド連中のとりまとめ役、皆でかい。体格の大小からくる本能的な序列というものが幅を利かせているらしい。その点、某国などはとてもユニークだ。

マサイの村を訪ねる。入村料500シリング也。この村に300人のマサイが暮らすと言う。中央に広場を有し、その広場を20軒ほどの小さく粗末な家を取り囲む。少なくともこれらの家だけで300人が寝泊まりすることはできないと思う。出稼ぎに出ている者でもあるのか、或いは300人というのは少し誇張しているのか。雨のせいで家の玄関付近までどろどろだ。家の脇でヤギを飼っているが、彼らの排泄物もそのどろどろに混じり、耐え難いものがある。ある家の中を見せてもらったが、自分が小学生の頃、北海道で作った「基地」とそう変わらない。土間。細い木の棒で寝床になるところと、居間になるところを仕切っている。泥壁に20cm位丸く穴を開けただけの窓。少し屈まないと天井にぶつかる。小汚いポリタンクが、水ため兼椅子になる。蚊避けだろうが、煙をけっこうな勢いで焚いており、むせる。母親が、具合の悪い赤ん坊に添い寝をしている。余談だが、ものの本で、マサイでは、若者が求婚するときに、その娘の家にエシレット・エ・ンコショケという「胃袋の贈り物」をするらしいことを知った。実際には、何を贈るのやら。それを受け取ってくれたら、諒、ということらしい。そう言えば、TVでマサイのアップ・アンド・ダウン・ダンスをみたことがある。その場で、ピョーン、ピョーンとジャンプするだけなのだが（いや、もしなにか難しい決め事や技があるなら失礼をお許しいただきたい。）、これも自らを未来の花嫁花婿に印象付ける意味がある踊りらしい。この辺で、ケニヤ、ウガンダ、タンザニアで話されているスワヒリ語の紹介。ただし、一回で覚えられそうなもののみ。「こんにちは」「ジャンボ」はあまりにも有名。「有り難う」の「アサンテ」もよく聞く。また、「どういたしまして」の「カリブ」も覚えやすい。「初めまして」は、「ハリガニー」と針金のような固い印象。「ゆっくり」の「ポレポレ」もよく聞く。「こんにちは」は、「ハバリー」と何かはばかりがありそうだ。「さよなら」の「クワヘリー」は腹でも空いたようだ。「はい」は「ンディヨ」、おじさんが話を続ける時の接続詞、の感がある。「私」は「ミミ」、ここはどこ？「あなた」は「ウエウエ」。「私は日本人です。」は、「ミミ ニ ムジャパニ」となるようですが、3回早口言葉で言えたら偉い。6「シタ」7「サバ」10「クミ」。「きれいな」「マリンボー」。「街」が「ジジ」なら「道」は「バラバラ」。とても気に入ったのが「バラバラ クー」で意味は「高速道路」。「女」は「キケ」、「ムコノ」が「手」。「仕事」は「カジー」。「ハタリ！」と言われたらパタリと止まった方がいいかもしれない。はったりではなく「危ない」と言っているのだそう。「青」の「ブルーBuluu」は英語の影響でしょう、きっと。「あなたのお名前は？」「ジナ ラコ ナニ？」なに？。スワヒリ語の形容詞は名詞の後に来る、フランス語のようだ。しかも名詞の単復によって形容詞も変化する。もうこの辺で勘弁してもらおう。感心したのは、7～8歳くらいの子どものマサイの子どもが、とてもはっきりとした英語で、「これが、窓です。」とか「ここで、寝ます。」といった具合に説明をしたことだ。一般のフランス人より英語は上手だと思う。子どもに10FFあげた。

黒みを帯びるほどに極めてこい緑の草原を、マサイの飼う白地に黒ブチの牛の群が歩いていく。牛追い人マサイの着る真紅のキーコイが派手なアクセントになっている。真っ青な空には、真っ白な雲が二切ればかり漂う。大地より生まれ、大地とともに生き、大地に帰る。

途中、ジャケットが見つかった、と連絡が入る。ほー。まずは、よかった。よかった。しかし、これからは、本当に気を付けよう。それに人様を疑っていた自分が恥ずかしい。

ナイバシャのロッジは、庭などとても広く贅沢である。白黒コロブスがエントランス付近の大きな樹上に4、5匹いる。冠鶴やダチョウ1つがい、各種オウムなどを飼っている大きな鳥小屋もある。オウムのおもしろい仕草をしばし

観察する。亀もいた。しかし、ここには、蚊がたくさんいる。私のコテージを友人のそれと間違えているらしく、フランス語で何か言いながら2度、3度ノックしていく者がある。

ベッドの横にある、目覚ましなどを置ける小さな台の辺りから、蠅の羽音がする。気になるので、引き出しを引っこ抜いてみたり、台をひっくり返したり、いろいろ試みたが、とうとう羽音の主を見つけることが出来なかった。狐につままれたような感じだ。考えられる可能性は、板のどこかに空洞があり、そこにその主が閉じこめられているということとか、もともと生き物ではなく、その板が膨張するか何かして羽音にそっくりな音を立てていたのか、くらいだろうか。この辺から聞こえるというポイントがあるだけに、耳鳴りというのは考えにくい。それでも5分くらいいろいろ見てみたがあきらめた。不思議である。備え付けのシマウマのマッチ、その名も「セーフティー・マッチ・ゼブラ」が気に入り、日本製ののど飴各種と交換にもらってしまった。

突然、詩のコーナー

マサイの男が走る

走る、走る、走る

また、一人、マサイの男が走る

走る、走る、走る

また、一人、マサイの男が走る

牛がシンバに襲われたらしい

自慢の槍と勇気を持って

真っ赤な服をはためかせ

マサイの男が走る

走る、走る、走る

選者評：稚拙ながら自由でのびのびした詩です。

「真っ赤な服がはためく」というのは、まるで本当に見てきたみたいな表現ですね。

作者コメント：本当に見ました。

鳥の楽園

1月14日 ナクル湖国立公園

今回、最後の訪問地となるのはナクル湖公園だ。道の両側が少し高い丘のようになっているところで、にわかにごしや降りに襲われた。凄い勢いで濁った流れが道路めがけて襲ってくる。雨季は毎日こんなのだろうか。一寸先も雨だ。と、きゆうに雨がやみ、視界が開け、辺りが冷え込んできた。可哀想にマサイも寒いだろうに。途中から湖岸のピンク色が目に入る。最盛期には200万羽いたといわれるフラミンゴだが、今は100万羽位らしい。なにしろ、ペリカンもなにもかもすごい数があるから。フラミンゴの飛ぶ様は、何かナウシカのダイオウヤンマのそれを彷彿とさせる。いやちょっと違うかな。セサミストリートで、蛇に羽が生えて飛んでいくシーンがあったが、そちらの方が近いかも知れない。どうも首が長すぎるのか、なじみがなく、変だ。しかし、飛べないお前に何がわかる、と言われるのがオチだろう。いや実は、私もパラグライダーで空を飛んだことはあるのだが、...、釈迦に説法になるのでやめよう。森が湖を遠巻きに囲むようにしている。誰かにおだてられたのか、ライオンが親子で木に登っていた。ここの動物は、他の公園のに比べてよく肥えているのです、とラシッドが言った。

昼食をとったロッジは、見晴らしがよくいい感じでもっと気に入った。土産物屋で槍を買おうかと思ったが、胸位までの高さの小ぶりなものしかなく今一つだった。もし、これでマサイがライオンをやっつけるのだとしたら、それは、熊スプレーを熊の顔20cmのところから浴びせかけるのと同じくらい勇気と技術のいることだと思う。マサイは、私の見たところ、2m近い槍を使っていると思う。ロッジには日本人観光客で老年のご夫婦が一組いた。品があり、特にご主人は、堂々としている。ガイドとは、はっきりと堂々とした英語で話している。発音の正確さとか、流暢さとかよりも、大事なものがあるのだね。外国で日本人を見ると、彼らが日本の評価を上げる種類の人か、下げる種類の人かと言う観点から見てしまう。このご夫婦は、明らかに前者だ。私もかくありたいと日々努力している。が、なぜモンゴロイドが一人、コーカソイドの群に混じっているのだろうか、何をしているのだろうか、という素朴な疑問を、私自身の行動・振る舞いで打ち消すことは難しい。軽薄な若者風情が、旅の恥はかき捨てとばかり傍若無人に、またいやしく強欲に思慮浅く振る舞う、そういうことから、できるだけ対局にあるような行動を心がけてはいる。が、自分自身がどう映るかは知らぬが仏かも知れない、ダンスのように。

大きなバブーンが、従業員の目を盗んで中庭に出没し、小鳥用の餌を頬いっぱい喰らっている。猿公園の猿ではなくて、野生の中であって、日々レオパードなどの脅威と戦っている本物の野生のバブーンだ。従業員が箒を振り上げて追いかけてくると、慌てて逃げるまねをするが、本気で逃げてはいないし、どうせまた戻ってくるのだから遠くまで逃げることもしない。

ウォータバックのカップルの後で見たキリンは、膝下が白くロスチャイルドらしかったが、ガイドブックの分布図では、ナクル湖付近にそれらしい印がないので「?」。皆これまで、予想以上にいろいろな動物を見ることが出来、大方満足していたが、レオパードを見るのが最後の願いだった。ガイドのラシッドが今日8度目に「インシャラー」と呟いた時、摩訶不思議、一陣の風とともに無線で連絡が入った。急ぎ、その現場に向かう。あそこにいる、とラシッドはいう。誰も見つけられない。しばらくして、レオパードが木に登り始めたところで、皆やっと見ることが出来た。木の枝、と言っても地上からそれほど高くはない、の付け根でお昼寝だ。このレオパードは、特にビデオの白黒のファインダーでは捉えにくかった。一旦動きを止められると、容易に発見できない。いわゆるBig 5 が何を指すかには、異説を唱えるガイドもいるようだが、一般には、象、ライオン、サイ、バッファローそして、このレオパードが入る。これにて我々のグループは皆、5を見たことになる。なんという幸運だろう。ただし、カバを入れるとなるとだめだ。我々は、はっきりとはカバを見ていない。水面に出た鼻を拝んだだけだから。私個人の今後の見てみたいBig 5は、キングチータ、ゴリラ、チンパンジーないしボノボ、オリックス、それからボンゴかセブルアンテロープかな。ガイドが言うところのシロサイも見た。が、ガイドブックによれば、東アフリカではシロサイは絶滅しており、ケニアでは見れないはずだ。クロサイとシロサイの違いは、唇で見ることでもできる。フックしていればクロサイで、ワイドに横に平たければシロサイだ。ただ、これは2~3のガイドブックの写真とそれぞれのネーミングから推察した説である。残念ながらあのサイは遠すぎてシロクロ決めかねた。

マサイの子どもにのど飴をあげた。

Hi, children, make a line here.

Put your hand like this.... voila.

I' m gonna give you Japanese candies.

This is for you.

Thank you sir.

This is for you.

Thank you.

For you.

Thank you very much sir.

For you.

.....

For you.

Thank you very much, I love Japan.

Oh, good boy.

でも、これは夢だったのです。

今度は本当に出来るといいね。

以上で、サファリは終わり、後は帰路となる。

夕方にかけてナイロビに向かう。ナイロビは、さすがに都市といえる。高層ビルもあり、なにより人がいる、いる、いる。現代的な経済活動が営まれているという雰囲気が感じられる。おもしろいことにほとんどの人が傘を持っている。こちらの雨ははんぱじゃないから。道路は渋滞し、大気も汚れているようだ。しかし、スコールの後で濃度測定をすれば、相当誤魔化せるだろう。渋滞の車の合間を少年が歩く。彼らは窓の隙間から手を入れ、財布をとって逃げてしまうので、よくよく気をつけなければいけない。ナイロビ駅に到着し、ここで列車に乗り換える。夜行のエキスパレスでモンバサに戻るのだ。1等車を使う。1206号車のC。車両の番号が規則的になっておらず、探し出すのに時間がかかった。原則2人で一室なのだが、私の所は、別のグループが1人分キャンセルしたらしく自分1人で悠々と使うことができた。蚊取り線香も気兼ねなく焚けるし、いつ寝ようといつ起きようと、迷惑がかからない。いやそれより、万が一にも人のいびきに悩まされたり、その逆の心配をする必要がないのがいい。予想していたより安全そうだが、予想していたより不潔だ。19時15分、ボーイが、フォークをならしながら食事の開始を知らせて歩く。隣の食堂車で夕食をとる。隣に座ったのは、ケニア在住の白人青年22、3歳だろうか。もともとはフランスからアイルランドに移住した人が祖先だそうで、父はナクル生まれ。自分の名前はフランス風、イギリスで教育を受けたが、さらにアメリカの大学で学ぶ予定とのこと。「環境マネジメント」に関心があると言ったので、私はISO14000や環境監査のことを話し始めたが、彼にその種の専門の知識はなく、話がかみ合わない。どうも如何にうまく自然を保護するか、その程度の意味らしい。夕食から帰ると寝台室に敷布と掛布、枕が用意されてあったが、なんか汚い感じがするので、枕にはタオルをかけ、パジャマの上下を着て寝た。蚊取り線香を焚きすぎたのか、息苦しくなり、窓を少しあけ、網戸（なんと網戸が付いている！）にして、まどろむ。途中幾度も停車する。エキスパレスといっても、普通の各駅停車である。

旅の終わり

1月15日 ナイロビからモンバサへ

食堂車に入ると、既に朝食を済ませコーヒーの最後の一口を飲んでいたフランス人老夫婦に手招きされた。彼らの横に座る、しかなかった。私がどんなに「ワタシ、ワカラナイ、フランスゴ」といっても平気で話しかけてくる。2通りの作り笑いを交互に繰り返すしか私にはスベがない。わかったような作り笑いとわからなかったような作り笑いだ。実はこの老夫婦、前から私に目をつけており、話しかけてきていた。フランス人に交わらず、一人でぼつねんとしたかわいそうなアジア人とでも写っていたのか。前に、「あなたは、どこから来たのか？インドネシアかベトナムか？」と聞かれた。「私が、南方系のアジア人に見えますか？南方系は一般に色がもっと黒くて、もう少し小柄で、顔立ちもこう、違うんだなあ。（私の思い込みかも知れないが、私の知るインドネシア人とベトナム人の公約数はそんなところになる）．．」とそこまでいうフランス語、ワタシ、シラナイ。「Non, Non, Japon オフコース」と「Non」に万感を込め、かつ「Japon」にあなたもちろん日本という国がどこにあるか地図の上で指せるでしょうね、の意味を込めて、しかも「オフコース」に自分が日本人であることの大きい誇るを含めて返答した、つもりだ。もし彼らが、Japonを知らない、と言ったら、そのミノルタのカメラを取り上げて、あなた、この優秀なカメラを作っている国のことも知らずに使っているのか、と言ってやればいいのか、言葉に詰まって、結局ニコニコとカメラかレンズのJaponを指さすことになるのだろう。まあ、とても朗らかな感じの人だし、知人になってもよかろうが、言葉の壁がね。ややあってこの老夫婦、ボーイに、チップを要求され始めて困った。何を言っているのかわからないという風をしていたが、老夫婦にははっきりくつきりわかっていたはずだ。しかし、あからさまにチップを要求するとは。いつぞやの追加融資を脅迫的に日本に迫ったメキシコの連中を思い出す。もっと貸さなきゃ今まで借りた分返せないと、バカを言え。まあ、この場合20シリング（40円）でも置いておけば世の中まああるくまああるく収まるのだが、もめている。それも大事かも知れないが、「私は、いつになったら朝食を食べられるのか」と質問した。OK、OKと言ってボーイが下がったスキにこの老夫婦、「助かったよ」と言う風に私にウインクして、その場から逃げ去った。良いことをしたのか、悪いことをしたのか。さて、テーブルの上を見回すと、明らかに皿やコップが汚い。指でこすると。げっ、汚れが指に付く。これは、だめだ。イエローアラートだ。たまらず、席を立った。こういう時のために、わざわざ、モノプリでチョコレートビスケットを買って持ってきたのだ。水もただのボルビックではない。ポカリスエット粉末入り、最新の科学的知見を下に浸透圧が体液のそれと等しくなるように調整されている。さらにデザートには、ナッツ入りチョコレートバーもある。これで、大丈夫だ。でも、あの老夫婦は、大丈夫だろうか。

列車が徐々にモンバサに近づくにつれて、だんだんと蒸し暑くなってきた。汗をかいて気持ち悪い。一等車には扇風機が付いている。試してみよう。スイッチ、オンというかスイッチレバーを右の方に押し上げると、るるるるる．．．あー、涼し。ある駅で停車中に、前方に薄汚れてちぎれたTシャツを着た、周りの子より小さな子どもがいるのが目に付いた。列車が動き始め、彼の近くを通り過ぎようとした時、私は彼に指をさして、君にあげるよ、と目で言った。少年は私の合図に気がついた。キャンデーを2つ下手でほうった。アツと言う間に彼は2つともキャンデーを拾った。野生の素早さだった。近くの他の子どもは、気づいたのか、気づかなかったのか。あの素早さがあれば、きっと、彼は日本製のど飴カリン風味を堪能することができたと思う。

朝8時頃の到着予定は大きく遅れ、14時過ぎにモンバサ駅に到着。一人だけの日本人は、グループの観光客ではないと見られるようだ。呼び込みのあんちゃん達を集めてしまう。タクシー？と何度聞かれたか。10シリング（20円）で、ヘリコプターとかいうのもあったが、なんだそりゃ。そこのお巡りさんに調べてもらうぞ。

その後、ホテルに行き、一泊。ドイツ人観光客がたくさん来ている。フロントで、ジャケットと感動の再会。ゴメンネ。寂しかったろうね。部屋に入るとまず蚊取りを焚いて、シエスタ。ああ、お昼寝は気持ちがいい．．．

その間に、音もなく、あることが進行していた。机の上に、洗面用具などを出したまま寝てしまったのだが、起きてみるとびっくりした。なにやら小さい白い虫のようなものがたくさんせわしく動いている。櫛やら、ヒゲソリやらの辺りにとにかく白い虫がたくさん。人の気配に気付いたのか、突然、わっと、蜘蛛の子を散らすようにちりじりになった。クモだ、と最初思った。これがもし、シラミとかの類で、昨晚知らぬ内に列車の中で一晩共にしていたのかと想像すると、鳥肌が立つところではない。しかし、クモならまだいいと思った。ところが、一匹捕まえてよく見ると、なんとアリだった。アリにしては、動きがとても素早い。こんなに早く動くアリを見たことがない。半ば飛ぶような感じで動

いていく。アリならば、道があるはずだ。あった。壁と床の隙間から、机の右後ろの脚を伝って、机の上まで来ている。机の上に置いてあったものを、一つずつアリをはらって、丸テーブルに移す。ウエットティッシュでアリの道を拭き、近くにちり紙を敷いてその上に飴とポカリスエットの粉を撒く。これで一網打尽、の予定だったがどうも集まりが悪い。私の作戦は完全に読まれたのか、ちり紙包みの刑にできたのは、十数匹だけだった。アリの騒ぎはそれで治まってしまった。ホテルの売店で「アフリカで最も美しい歌々」というカセットを買ったが、後で聞いてみると、うーん。廊下で特大のカニとヤモリに遭遇した。

夕食時には、生バンドでダンス音楽が奏でられる。スロー、ロック、ワルツ、ブルース。でもこんな中で踊ったら暑い暑い。朝はピスケットだけ、昼は抜いてしまったので、ちゃんとしたものを食べるのは、ほぼ24時間振りになる。食堂もそろそろ混んできた。そうそうに切り上げよう。

モンバサはやはり暑苦しくて眠れない。

生還

1月16日 モンバサからパリへ

朝4時半ホテル出発予定だったが、5時頃に出発。今日は帰国せずに、もう一週間このモンバサのホテルでブラブラだかラブラブだかする人達もいる。飛行機は、8時発の予定が1時間強遅れて出発。帰路は早い。あと3、4時間かなと思ったらにわかにな食事が出て、それが終わるともう降下を始めた。トントントンとバカ通りの自宅に無事到着。ドット疲れがでるかと思っただが、元気でピンピンしており驚いた。普段なら1週間は放っておく荷物の整理などその場でススイできる。洗濯もしてしまう。この体調の良さ、何か理由があるのだと思うが、わからない。アフリカン・パワーかもしれない、意味が違うか。

こうして、あこがれのブラックアフリカ、ケニアへの第1回目の旅は、大過なく終わった。しかも今回のサファリは、予想以上の感動を私に与えてくれた。動物好きにとってはたまらない経験となった。

なお、これまでのところ得体のしれない病気の症状などはでていない。

残像のアフリカ

パリ。ブローニュのアパート。

心に後遺症が残った。

飽和、してしまった。涙が出るほどに、声を上げたくなるほどに、心が震えてしまった。あまりにも多くの気持ちが一度に湧き起り、渦を成し、理性がそれをさばけないでいる。大なる野生の王国が、私の生きている二〇世紀末というこの時代、この地球に、確かに存在する、そのことが有り難かった。野生の動物達と時空を共有できた、そのことに感謝したかった。ガゼルの瞳に奥深い優しさを感じてしまった不思議さが忘れられなかった。その後目の当たりにした野生の掟には、ガツンと頭を殴られたような気がした。考えにくいことだが、それは決して珍しくもない、ごくごく普通に訪れる生命の終焉だったのだ。ブッシュの奥に消え入ったクロサイの寂しげな後ろ姿には、滅びゆく種としての生命の悲痛な叫びを聞いた気がした。バッファローの群に一斉に見つめられた時には、他の生命と大きく異なる道歩んでいる人類に対して、それでいいのか？と問われているような感じを持った。大自然の中で、誇りを持って自立した生活を営むマサイ族の前では、自分がなにか小ずるく勇気のない生き物であるように思えてしかなかった。

社会生活を営む上で、様々なトラブルに遭うのは避けがたいことであるし、そのトラブルの克服が、個人の成長と、種としての人類の進歩に貢献してきたのかもしれない。しかし、我々は日々、あまりにも小さな事にとらわれすぎているのではないかと思うようになった。そして、現代の西洋的な文明のあり方がこの素晴らしい大自然を急速に失わせる方向に向かっているにも関わらず、ただその文明の果実を喰らうだけの生活を送っている自分の生き方が恥ずかしく、心底反省したくなった。経済的合理性が絶対の価値基準、行動原理となり、大量生産・大量消費・大量廃棄に特徴づけられるこの現代社会のあり方そのものを、変えなくてはいけないのではないかと、と流れに抗して生きることの可否をも考えるようになった。

目を閉じる。自分は再びアフリカの大地に立っている。白い雲が、果てしのない青空に浮かぶ。遥か彼方の地平線まで、自然の創造物だけが、存在を許されている。黒いほどに深い緑色の大地では、無数の生命の受け渡しが、気が遠くなるほどの時間、脈々として繰り返されてきた。この大地と大空という圧倒的な存在者は、小さな自分など簡単に飲み込んでしまう。無数の生命の中であって、自分はただ一つの命に過ぎず、無限に繰り返される自然の営みであって、自分はただ一瞬の存在でしかなかった。